

検査室は、ゲノム医療の波にどう乗るか？

◎中谷 中¹⁾三重大学医学部附属病院中央検査部¹⁾

近年、「ゲノム医療」が急速に臨床現場に導入されている。2018年ゲノム検査に基づいたコンパニオン診断薬が続々と承認され、本年にはがん遺伝子パネル検査が保険適応となり、ゲノム医療への流れは勢いを増している。この潮流の中で、検査室の果たすべき役割について考えたい。

ほとんどの医療機関では、ゲノム検査の多くは外部委託されることが多いと思われるため、検査室はプレアナリティカルとポストアナリティカル部分を主に担当しなければならない。しかし、がんゲノム医療では腫瘍内科など診療科と検査センターの間で検体やデータが直接受け渡しされ、検査室が関与していない状況も存在している。また、検査室に戻ってきた結果報告書が進展となっており、検査結果はおろか、報告書のその後の所在さえ把握できていないとの悩みも聞かれる。このようにして、検査室がゲノム医療の傍観者になっていないだろうか？臨床検査の本質に立ち戻ってみると、これらのゲノム検査はいわゆる委託検査であることから、検査室はこれまでと同様に、検体の品質管理だけでなく、検査の品質、検査結果の妥当性や結果報告書の管理に関して、責任があることを忘れてはならない。ゲノム検査は、多彩な検体、多彩なアプリケーション、様々な検査センターで実施されており、それぞれの品質を評価することは非常に難しく、現状では十分なされているとはいえない。しかし、診療科の医師が評価することは更に難しいと思われるばかりか、検査品質の重要性を十分に理解しているとは言い難い。検査室は、これまで培った臨床検査の評価システムにゲノム医療の新しい情報と知識を加え、品質を担保した良質なゲノム検査を提供できるような体制構築を主導的に提案しなければならない。我々検査室は、「ゲノム医療」号の重要なエンジンであるゲノム検査を適切に回転させることにより、時代の急流を乗り切ることができよう。